
MOON番外編『朝子さんの華麗な1日』

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON番外編『朝子さんの華麗な1日』

【Nコード】

N9588L

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

和人たちの「世話人」朝子の1日を追ってみました。

(前書き)

さて、彼らは日頃どのような生活をしているのでしょうか？

朝、起きる。

A M 6 : 0 0、カウンターキッチンへ向かうと既に秀が居をなしていた。

「朝子、腹減った。何かない？」

「はいはい。」

この事を予期していた朝子は、昨日の深夜に注文してとっておいたピザ^ピーラの特製スペシャル三段重ねカルボナーラ・ハンバーグピザ（そんなもの本当にあるのかよ：作者注）を彼の目の前にホット・キリマンと一緒に差し出す。

「本当、朝子ってよく気が利くよな。いい嫁さんになるぜ。」

ピザとキリマンを頬張りながら、秀が呟く。

「お世辞はいいから、早く仕事に行つてよ、秀。あなたがいると、掃除も洗濯もあなたへの食事の世話で出来ないんだから。」

「そりゃ、どうも。」

そこへ、祐希登場。

「おはよう、朝子さん。」

既に、制服姿に着替えている彼はにつこりと笑って、「秀さん、早いね。あんな遅くまでコンテ作ってたのに。」

「24時間闘えますか、が俺のモットー。」

秀はにやりと笑って言った。

「祐希くん、もう出かけるの？」

朝子が彼に尋ねると、

「バスケの試合があるんだ。その早朝練習が今週からあるんだ。」
そう答えた。

「あら、いやだ！早く朝食の用意しなくちゃね。」

「俺の分もヨロシク。」

秀が彼女の台詞を追いかける。

「秀！あなた、今食べたの何だったの？」

「間食。」

ブラックのキリマンを一気に流し込む。「朝子特製のフレンチ・トーストでいいからさ、あとコーヒーもう一杯。」

「秀さん、朝から調子いいね。」

「誰かさんと違ってね。」

部屋の南側に位置する、祐希と同室の和人を視線で促す。

「朝子、和人を起こしといてくれよな。打ち合わせ10:30からだから。」

「はいはい。」

朝子は、祐希用にミルク入りのキリマンを差し出しながら答えた。さっそく、フレンチ・トースト用に卵を割る。

「最近、九桜の一族も静かだから、秀さんも和人も『昼』の仕事に集中できるね。」

「そういう事。」

秀はキリマンを受け取りながら、「もう新作の時期だし、英国からもクライアントが入ってるんだ。」

「すごいね。」

ジュワー

カスタードを入れたトーストの香りがフライパンから溢れる。

「朝子、まだー？腹減った。」

秀が呟く。

「だーかーらー、先刻食べたピザは何なのよ！」

「おやつ。」

「はい、出来たわよ、秀。とっとと食べて仕事に出かけてちょうだい。」

「はいはい。」

昼。

快晴である。

二人が出かけた後、18畳のリビングの掃除をし、シーツを含めた洗濯を終えた朝子はやっと一息ついた。

「本当、秀がいないとカウンターもリビングも綺麗に片付くわ。」

一仕事終えて、ソファに腰を降ろし満足気に微笑む。「毎日、こんなだといいわねー。」

と、そこへ、

ルルル ルルル

ソファの片隅に置かれた和人の黒い携帯になる。

「あー!!」

着信名を見て朝子は慌てた。「秀からだわ!忙しくて和人起こすの忘れてた……
もしもし。」

「朝子が何で和人くんの携帯に出るのかな?」

恨めしげな秀の声が、携帯の向こうから聞こえる。

「悪い!秀!即効、和人を起こすから。」

言うが早いか、朝子は携帯を切ると、南側の部屋へ飛び込んだ。

「和人、起きてちょうだい、仕事でしょ!」

「ん……。」

昨日の白いワイシャツにジーンズ姿のままで、朝子の声に和人は軽く寝返りを

打っただけだった。

「ねえ、和人!秀からよ……早くシャワー浴びて服着替えて。」
言いながら、彼のクローゼットから適当な洋服を選び出す。

「んもう!和人ったら!」

昼。

目覚まし時計の朝子。

夜。

「腹減った。何かない？朝子。」

祐希と深夜0：00までプレステをやっていた秀がカウンターに姿を現す。

「はいはい。」

この事を予期していた彼女はつい先刻届いたばかりの、ピザラ、カルヴォオナー風4段重ねチーズ・クリスピーザ（そんなもん本当にあるのかよ！：作者注）を丸ごと、彼の前に出す。

「和人からのおごりよ、昼間打ち合わせに遅れたお詫びだって。」

「さすが、和人ちゃん！」

ついでにアイス・キリマンを受け取りながら、秀は、「いい婿になれるぜ、和人。」

「あなたって人はね。。。。」

朝子は飽きれて、「食べ物につられる典型的なタイプね。」

「朝子。」

昼間の仕事を終えて、部屋で再び仮眠をとっていた和人が姿を現す。

半分、眠気眼で、

「血ちようだい。」

秀の隣に腰掛けた。

「あら！和人、そういえば3日前から血を飲んでないじゃない！」
思い出した風に朝子が小声で叫ぶ。「だから、眠ってばかりなのよ！」

慌ててシャツの左袖をめくり、手首を現す。

「サンキュ、朝子。」

和人は呟き、二本の白い牙を彼女の手首に付き立てる。

そして。

「朝子。」

「何、和人。」

「お前、いい嫁さんになれるぜ。」

「・・・そう。」

朝子はため息交じりに天井を見上げた。「婚活」でもしようかしら。」

< F i n >

（後書き）

作者が手を抜くと、MOONシリーズはこんな感じになります（
¥）。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9588/>

MOON番外編『朝子さんの華麗な1日』

2010年10月17日02時35分発行